

第I部 1848年革命と階級闘争論

2018年4月1日 奥村岳志

●全体構成（予定）

第I部 1848年革命と階級闘争論

第II部 インターナショナルとアソシエーション論（未）

第III部 パリコミューンと国家論（未）

●テーマ

- ・〈二大階級への分裂→階級対立の激化→階級決戦から革命へ〉という『宣言』の革命論は妥当なのか？マルクスの理論なのか？
- ・1848年革命期の中で『宣言』の革命論はどうだったのか？
- ・階級対立とは？階級闘争とは？これは自明なことか？
- ・マルクスの理論とエンゲルスの理論と「マルクス主義」は同じか？
- ・1848年革命期の『共産党宣言』と、1860年代『資本論』執筆期のインターナショナル「創立宣言」「暫定規約」との違いは何か？「創立宣言」は〈低めた内容〉という見方¹もあるがそうなのか？

●第I部の構成

目次

第一章 『共産党宣言』の革命論	3
第1節 48年革命からレイ・ボナパルトの登場へ.....	3
第2節 「自覚した少数者が大衆の先頭に」 ー少数精鋭主義への転換	4
●補論：「永続革命論」	5
第3節 「文明人の知力では解きえない」 ーレイ・ボナパルトという想定外	6

¹ 例えば、リャザノフ（1923）『マルクス・エンゲルス伝』では、「1864年の労働運動は…1848年の革命的前衛には遙かに遅れていた」「大衆および指導者たちの間の無産者階級意識の低い水準を考慮に入れて」内容を低めたと解説。その典拠はおそらくエンゲルスの『宣言』（ドイツ語版）「序文」（1890）

第4節 『宣言』の想定と現実のズレ	7
●補論：エンゲルスの“政治的遺言”	10
●小括	11
第二章 マルクスとエンゲルスと「マルクス主義」	12
第1節 『宣言』＝マルクスとエンゲルスの交錯点	12
第2節 エンゲルスの理論	12
第3節 マルクスの「経済学批判」	14
●補論：概念的把握	15
●補論：「疎外」概念に対する「未熟」「断絶」「難点」	16
●小括	18
第三章 マルクスの階級論・階級闘争論 —〈二極化→革命〉への対論	19
第1節 階級対立の真相・本質	19
第2節 自然史・人間形成史と階級対立	23
第3節 階級闘争論—いかにたたかうか？	25
■第I部 まとめ	30
■参考文献	32

第一章 『共産党宣言』の革命論

第1節 48年革命からルイ・ボナパルトの登場へ

▼バリケード戦とルイ・ボナパルト

共産主義者同盟は、1847年6月にロンドンで、亡命ドイツ人をはじめとする各国の共産主義者によって結成された秘密結社。ブリュッセルで活動していたマルクス、エンゲルスも参加。共産主義者同盟の綱領である『共産党宣言』（以下、『宣言』）を1848年2月に刊行。折しも1848年革命が始まったときであった。

1848年革命とは、フランス、ドイツ、オーストリアなどヨーロッパ全域に波及した同時革命。産業革命の進展、社会矛盾の拡大と恐慌の発生という中で、王政復活と反動支配に対して、自由主義と民族独立を求める反乱が燃え広がり、1849年まで続いた。

フランスでは、1848年2月にパリで市民が蜂起、王政が倒されて共和政の臨時政府が成立。6月には市民ではなく労働者が政府に対して大規模に蜂起し、激しいバリケード戦がたたかわれる。

しかし他方で、1848年4月の初の男子普通選挙では予想に反して急進派・社会主義派が少数に留まり、同年12月の初の大統領選ではナポレオン1世の甥ルイ・ボナパルト²が圧勝。さらにルイ・ボナパルトが1851年12月にクーデタを起こし独裁へ向かうも、人民投票では圧倒的な支持を受けるといった結果になった。

また、プロイセンでも軍隊と市民が大規模に衝突、自由主義政府ができるが、労働者の台頭を恐れるブルジョアが旧支配層と手を組み、軍隊によって革命が圧殺される。

▼渦中に飛び込む

話は前後するが、2月革命開始の報がもたらされるや、亡命者たちはパリに集結。マルクスはブリュッセルからパリに、さらにドイツ3月革命でケルンに入り、事実上の同盟機関紙となる日刊の『新ライン新聞』を編集発行に奮闘、バリケード戦や自治権力に加わる同盟員や労働者を鼓舞し続けた。1849年5月まで新聞発行に尽力するが、革命の波が引いていく中、マルクスにも国外追放処分が下され、やむなくパリに亡命、パリからも追放されロンドンへ。

▼ロンドンに亡命

ロンドンには、革命に敗れた亡命者たちが溢れていた。マルクスもそのひとり。

問題は、激動をくぐりぬけた者が、この展開をどう総括しどういう教訓をつかみ取るかだった。とくに、当初、革命の展開は、『宣言』の想定のように進むかに見えたが、結果は、フランスではルイ・ボナパルトに篡奪され、ドイツでは旧支配層とブルジョアが手を組んで圧殺された。想定とは大きく違う展開となった。

² 正式には、ルイ・ナポレオン・ボナパルト、一般にルイ・ナポレオンと呼ばれている。皇帝に即位して「ナポレオン3世」を名乗る。マルクスはルイ・ボナパルトと呼んだので、本稿ではそれを使う。

この総括の議論の中で、この時期のマルクスの革命論の輪郭が浮かび上がってくる。それはどういうものか。第2節ではそれを見てみたい。

第2節 「自覚した少数者が大衆の先頭に」 —少数精鋭主義への転換

舞台は亡命地ロンドン。共産主義者同盟はロンドンで中央委員会を再建し、総括と展望の議論をたたかわせる。その議論が同盟内の路線対立を尖鋭化させて同盟解体に向かわせるのだが、この過程でこの時期のマルクスの革命論の輪郭が浮かび上がってくる。それは、『共産党宣言』とも違う内容なので、便宜的に「1850年路線」³としよう。

▼『宣言』の革命論

まず、革命直前に書かれた『宣言』では、およそ以下のような点を綱領的に確認していた。(1)大きな見通しとして、世界は、ブルジョアジーとプロレタリアートの二大階級に両極分解されて行く。(2)当面は、旧支配層に対して、ブルジョアジーとプロレタリアートとが一定の段階まで共同してたたかう。(3)しかし、階級闘争は結局、二大階級の決戦で決着する。(4)近代の国家権力は、ブルジョアジー全体の共同事務を処理する委員会に過ぎない。(5)共産主義者の組織戦術は、他の労働者党に対立するものではなく、また、運動を型にはめるものでもなく、プロレタリアートの階級形成とプロレタリアートによる政治権力の奪取を当面の目的とする。

▼自覚した少数者への転換

ところが、1848年革命の現実の展開は、この想定のように運ばなかった。そこから(5)の組織戦術を中心に、マルクスは次のように主張を変更した。一連の文書から要点を列挙すれば以下のようなものだ。

第一に、マルクスは、1848年革命を敗北としたが、その意味は、革命の前進が、強力な反革命を生み出し、その反革命によって、これまでの革命党のあり方が通用しなくなったということだった。そして、その反革命と闘うことを通して真の革命党が成長していくとした。つまり、プロレタリアート自身ではなく、党を主語とする視点を押し出した。⁴

第二に、ドイツについては、その諸条件から、階級闘争の当面のヘゲモニーはプロレタリアートではなく民主主義者にあり、主要な党派闘争の対象は民主主義者であり、民主主義者の政策に対して労働者の政策を対置して、プロレタリアートの党としての独立性とそのヘゲモニーの強化を図っていく必要があるとした。⁵

第三に、強力な秘密組織の建設を打ち出すとともに、ブランキとの連携を打ち出した。⁶ブランキとは、フランスの革命家で、蜂起の場面に必ずと言っていいほど登場し、生涯の約半分の33年を獄中で過ごしたつわものだが、革命論としては、少数精鋭、武装急襲による権力奪取、革命独裁などを標榜した。

³ 補論：「永続革命論」を参照

⁴ マルクス（1848）『フランスにおける階級闘争』

⁵ マルクス・エンゲルス（1850）「1850年3月の中央委員会より同盟員への呼びかけ」

⁶ マルクス・エンゲルス（1850）「1850年6月の中央委員会より同盟員への呼びかけ」

第四に、10 時間労働問題や協同組合運動などの課題が浮上していたが、マルクスは、改良の課題は革命によってしか解決しないと、その意義を否定し、権力奪取に絞りを上げる戦略を主張した。⁷

第五に、ただマルクスは、主観的意志で革命情勢をつくり出そうとする他の幹部らの考えは退けた上で、恐慌が来れば革命は確実であるといういわば恐慌＝革命論を打ち出し、2 年後の 1852 年に恐慌は勃発すると予測した⁸。(実際には待望の恐慌は 1857 年まで起こらず、それに伴う革命も起こらなかったが)

『宣言』の確認からすれば、ずいぶんと違った印象を否めない。一言で言えば、「自覚したわずかの少数者が無自覚な大衆の先頭に立って革命を進める」⁹(晩年エンゲルスの反省的回顧) というものであった。

ところで、『宣言』はポピュラーであり、マルクスの一貫した考えを示した基本文献という理解が一般的だ¹⁰。しかし、実際は、『宣言』の革命論をもって 48 年革命に突入したが、その総括の中でそこからの転換が行われている。それが、あまり対象化されていないが、1850 年路線であった。

なお、レーニンやトロツキーは、この 1850 年路線を主張したマルクスの一連の文書をほとんど暗唱するほど頭に叩き込んでいた¹¹。振り返るに、私たちも、図らずもマルクスのこの曲折をなぞってきたといえる。

では、なぜ『宣言』の確認から 1850 年路線へという転換がなされたのか。そしてそれがどうなったか。それについては第 3 節で検討したい。

●補論：「永続革命論」

マルクスの革命論に関して、「永続革命論」という呼称がある。

「永続革命」という文言自体は、マルクス・エンゲルス「1850 年 3 月の中央委員会から同盟員への呼びかけ」において使われており、1848 年革命における小ブルジョア的妥協を排した労働者階級による革命継続の主張であるが、革命論として定式されたものとは言えない。

ところが、例えば淡路憲治『西欧革命とマルクス、エンゲルス』などでは、「永続革命論」を、『宣言』から 50 年代前半期のマルクスの革命論として一括りに定式化している。

本稿では、むしろ『宣言』の革命論が現実の運動展開の中で行き詰まり、そこから「1850 年路線」への転換が図られるなどのマルクスの曲折を重視しているので、「永続革命論」と

⁷ マルクス (1849) 『賃労働と資本』

⁸ マルクス (1850) 「評論、1850 年 5 月～10 月」

⁹ エンゲルス (1895 年) 『フランスにおける階級闘争』序文 (廣松編『マルクス・エンゲルスの革命論』／『全集』第 7 卷) [第 4 節 補論 エンゲルスの“政治的遺書”を参照]

¹⁰ 『宣言』は共産主義者同盟の綱領であり、それは大会決定にもとづいて、同盟幹部からマルクス・エンゲルスに執筆が委任された。組織的な討議を経て書かれている。またマルクスとエンゲルスのそれぞれの思想形成の中で『宣言』がどういう位置にあるのが重要であると思うが、その点については第二章で検討する。

¹¹ リャザノフ (1923) 『マルクス・エンゲルス伝』p104

いう呼称は使っていない。淡路の論の難点は、ルイ・ボナパルト情勢とそれをめぐるマルクスの悪戦苦闘と曲折の問題を対象化しないで、文献考証の観点から整序してしまった点である。(なお、トロツキーの「永続革命論」は、1850年3月「共産主義者同盟員への呼びかけ」から援用したものである)。

第3節 「文明人の知力では解きえない」 —ルイ・ボナパルトという想定外

▼なぜ路線転換を？

第2節で、1848年革命の展開の中でマルクスが、『宣言』とは違う1850年路線ともいべき主張を打ち出したということを見た。

問題はなぜそういう転換をしたのかだ。ルイ・ボナパルトの登場という想定外の展開に核心があった。

パリの1848年2月革命から6月労働者蜂起に至る情勢は、主役が次第に市民から労働者に移り階級的激突に上り詰めていくという『宣言』の想定通りに進むかに見えた。

しかし、他方で、4月に行われた男性普通選挙(6か月以上同一市町村に居住する21歳以上のすべての男性)では、有権者数が25万人から1千万人という規模に拡大、急進共和派や社会主義者などの左派の台頭が予想されたが、結果は約900議席のうち800を王党派とブルジョア共和派が占め、左派は100に留まっていた。さらに48年12月の大統領選挙ではナポレオン1世の甥のルイ・ナポレオン・ボナパルトが圧勝(総投票数の4分の3)。さらに1851年12月には、軍隊の力で議会を解散させるクーデタによって独裁へ移行するも、直後の人民投票でクーデタが圧倒的に支持された(744万票対64万票)。この展開はマルクスにとって想定外だった。

▼ナポレオン幻想

一体だれがルイ・ボナパルトに投票したのか。ブルジョア層ももちろんだが、大多数は新しい有権者層である農民と労働者。農民は新有権者の4分の3を占めた。都市では職人・労働者地区の支持率が高く、パリでは6月蜂起に参加した労働者層が支持した。¹²

ではこの人びとがどうしてルイ・ボナパルトを支持したのか。

農民にとっては、2月革命は都市での出来事であった。農村は、資本主義化する都市による収奪が進行していた。だから、農民は都市の出来事を冷ややかに見ていた。また、フランス革命からナポレオン1世の過程で農民は自作農になったが、やがて土地を拡大する富農と大多数の貧農・借地農という格差が拡大していった。貧農・借地農は憤懣を蓄積し、土地を欲した。そういう憤懣や要求がナポレオン1世の再来を求めるナポレオン幻想となっていた。

また、2月革命が王政を倒し、その後に成立する政府は、当初、労働者の要求を受けて、失業対策事業などの改革を打ち出すが、ブルジョア共和派の妨害と巻き返しによって、やがて反故にされていった。そういう政府や議会に対する労働者の幻滅と憤怒が、政府や議

¹² 中木康夫『フランス政治史』(上)

会を超える力を求めた。その怒りと要求もまたナポレオン幻想に結びついた。

つまり、ブルジョア社会の確立が進む中で蓄積する民衆の不満や反感、要求が、ナポレオン幻想という形で集団的に表象した。そういう民衆の心理を取り込んだのが、直前まで亡命中でさしたる組織もなかったが、ナポレオン幻想を操り、『貧困の絶滅』という著書で社会主義思想も匂わせ、〈民衆主権に基づく皇帝〉を標榜するルイ・ボナパルトであった。

13

▼「文明人の知力では解けない」

ルイ・ボナパルト問題をマルクスはどうようにとらえたか。

「1848年12月10日（大統領選挙）は農民反乱の日であった。農民が革命運動に入ってきたことをあらわす象徴、不器用で狡猾、ならず者ので素朴…文明人の知力では解きえない象形文字—こうした象徴は、文明のなかで野蛮を代表するこの階級の人相を、紛れもなく示していた」「ナポレオン、それは農民にとって人ではなく綱領」¹⁴

「それ（ルンペン・プロレタリアート）はすべての大都会で産業プロレタリアートとは截然と区別される集団であり、泥棒やあらゆる種類の犯罪者の供給源であり、社会の落ちこぼれ屑をひろって生活し、定職を持たない人間…」¹⁵「ルンペン・プロレタリアートの首領におさまったルイ・ボナパルト、…あらゆる階級のこれらのくず、ごみ、かすこそ自分（ルイ・ボナパルト）が無条件にたよることのできる唯一の階級」¹⁶

「ルイ・ボナパルトは、フランス中でもっとも単純な頭の男」「とるに足らない人間」「昔のナポレオンの戯画」¹⁷

マルクスは、ルイ・ボナパルトを支持した農民や労働者に向かって罵詈雑言と差別言辞を浴びせている。他方で、ルイ・ボナパルトその人については取るに足らないと過小評価した。

▼革命路線の行き詰まり

これは、「文明人の知力では解きえない」事態に対するマルクスの苛立ちであり、『宣言』の革命論が、ルイ・ボナパルトの登場という想定外の展開に対応できていないという危機の表白といえるだろう。それが1850年路線への転換を促した動機といえる。では、『宣言』の革命論にどのような問題があったのだろうか。第4節で見てみよう。

第4節 『宣言』の想定と現実のズレ

第1節から第3節で、『宣言』の時点では、マルクスは、「プロレタリアート全体の共通の利益」「運動全体の利益」を代表するという立場を打ち出していたが、亡命地のロンドンでフランスの階級闘争の動向に対応する中で、少数精鋭主義的な革命論に傾斜していった

¹³ 西川長夫『フランスの近代とボナパルティズム』、鹿島茂『怪帝ナポレオン三世』

¹⁴ マルクス（1850年）『フランスにおける階級闘争』

¹⁵ 同上

¹⁶ マルクス（1851年～52年）『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』

¹⁷ マルクス（1850年）『フランスにおける階級闘争』

こと（1850年）、それがルイ・ボナパルトの登場という『宣言』の想定外の事態に迫られたものであったことを指摘した。では、『宣言』の想定とはそもそもどのようなものだったか。

▼「階級闘争の歴史」

「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」。「ブルジョアジーの時代は、階級対立を単純にしたという特徴をもっている。全社会は、…ブルジョアジーとプロレタリアートとに、ますます分裂していく」。「ついにそれが公然たる革命となって爆発し、プロレタリアートがブルジョアジーを暴力的に打倒して自分の支配をうちたてる」¹⁸

あまりにも有名な『宣言』のフレーズである。『宣言』は48年革命の目前に打ち出された共産主義者同盟の綱領であり、当面する歴史社会の動きとその必然性を明らかにし、未来社会の展望とそこに向かう行動の指針を示したものであった。〈二大階級への分裂→階級対立の激化→階級決戦から革命へ〉（以下、〈二極化→革命〉）という見通し・歴史観・革命論を単純明快に指し示した。

それは次のような見通しに支えられていた。

「従来の中間身分の層…は、プロレタリアートに転落する」。「プロレタリアート内部の利害や、彼らの生活状態は、ますます平均化されてくる」。「個々の労働者と個々のブルジョアとの衝突は、ますます二つの階級の衝突という性格をおびてくる」¹⁹

ブルジョアジー以外の人びとはあまねく労働者階級にフラット化され、そのことによって階級決戦情勢が成熟するという見通しである。

▼フラット化

ところが、48年革命の現実の進展はそう単純で明快なものではなかった。革命の前進の前に、ルイ・ボナパルトが立ちはだかった。しかも、ルイ・ボナパルトは、多くの農民や労働者の支持を受けていた。

農民は、『宣言』では没落・消滅が不可避な存在とされたが、歴史的な事実として、数の上ではたしかに減少するが、それでもこの時期、フランスの全人口54%と最大多数を占め、その農民がルイ・ボナパルトを登場せしめるという歴史的な役割を演じた。

労働者階級自体も単純にフラット化されるものではなかった。資本主義の確立過程であるこの時期、労働者階級といってもその実態は職人的労働者層であった。この職人的労働者たちがいち早く労働運動を開始していた。

他方で、周辺諸民族・農村地域から職を求める人びとや、旧秩序から放り出されたが新秩序の中でも排除的に扱われる被抑圧民族や被差別人民が、都市に流入し貧民街を形成し、やがて、相対的過剰人口の下層に押し込められていった。資本主義の進展とともに、むしろ、労働者階級の内部の階層化が進んでいった。

その最下層に押し込められた人びとが「ルンペン・プロレタリアート²⁰」であった。彼ら

¹⁸ 『共産党宣言』（1848）

¹⁹ 同上

²⁰ Lumpen とは〈ぼろくず〉の意味。差別規定である。

は、48年革命の中で、革命の側にも反革命の側にも加わり、最前線で犠牲になった²¹。

▼国家論

国家について、『宣言』では、「近代の国家権力は、全ブルジョア階級の共同事務を処理する委員会にすぎない」。「本来の意味での政治権力は、他の階級を抑圧するための一階級の組織された暴力である」と規定した。

その規定は、社会が二大階級の対立に整序されていくという見通しに基づいたものであった。しかし、それだけでルイ・ボナパルトの体制²²を説明できるものではなかった。

ルイ・ボナパルトの体制は、単純に、ブルジョアジーの要求通り作動するものではなかった。ブルジョアジーの利害を一部犠牲にしてでも、〈上から〉の改革を推進する革新性があった。

それだけではない。〈上から〉の側面だけでなく、〈下から〉の側面があった。第3節で見たように、民衆の不満や反感、要求が、ナポレオン幻想という形で集団的に表象した。あるいは政府や議会に対する労働者の幻滅や憤怒が、政府や議会を超える力を求めた。つまり、民衆自身がルイ・ボナパルトを押し上げ、その独裁を求めたという側面が無視できない問題として存在した²³。

そういう全体を通して階級支配が貫かれ、その前提に警察と知事の官僚組織が存在した。

そして、ルイ・ボナパルト体制は、一過性のものではなく、その後20年間続く国家の常態であった。

▼理論と現実のズレ

このように、『宣言』で示された理論と、労働者階級の実態や階級闘争の進展の現実との間にズレがある。マルクスの明示の言及はないが、そういう問題が突き出されていた。

他方、理論と現実の間を架橋する説明理論がマルクス以降、提出されてきた。アトランダムに列挙すれば—

- ・ 『宣言』はもっと長いスパンの傾向を打ち出したのであって、ルイ・ボナパルト情勢に妥当しなくても問題ではない。
- ・ 理論と現実のズレは実態分析を深める方向で解決を図るべきだ。
- ・ マルクスは、後にイギリスを中心とする世界編成の中で48年革命の趨勢も総括しており、その視点でとらえ返すべきだ。
- ・ マルクスは労働者階級について、当初、哲学的な観点から把握したが、『資本論』の中で理論的にも実態的にも大きく深化された。『資本論』の体系の中でとらえ返すべきだ。
- ・ マルクスは、後にアイルランド問題の把握を通して階級構成について深化しており、その視点からとらえ返すべきだ。

²¹ 良知力『向こう岸からの世界史—一つの48年革命史論』

²² 「ボナパルティズム」はマルクスの用語ではなく、エンゲルスのものでかつ概念としても異なるので、ここでは使用しない。

²³ マルクスは、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』（1851-52）で「国家は完全に自立化したように見える」とし、新しい国家規定を模索している。マルクスの国家論については第Ⅲ部で論及したい。

- ・ 問題は、階級と階級闘争が、即自的（階級的に自覚していない）なあり方から対自的（階級的に自覚している）なあり方に飛躍する組織や戦術の問題として扱うべきだ。
- ・ レーニン帝国主義段階論の確立により、そのパラダイムの中で解決が図られている問題だ。

それぞれ重要な論点だと思うが、いずれも、〈二極化→革命〉というシェーマを不動の前提としている。たしかに『宣言』では中心的な命題をなしていたが、マルクスの初期の理論や『経済学批判要綱』『資本論』を経た理論の中で、この問題はどのようにとらえられていたのか。そういう検討が必要であると考ええる。

この問題は、時代を下ってマルクスもエンゲルスも没した直後から、ベルンシュタインの提起に端を発して、修正主義論争という形で顕在化した。そして、この論争はかまびすしく戦わされたが決着を見てはいないと考える。

●補論：エンゲルスの“政治的遺言”

エンゲルスは、没する直前の1895年に『フランスにおける階級闘争』の単刊本化のために序文を書いた。そこで1848年革命とその中での1850年路線について自己批判的に言及している。

「歴史は、われわれでさえも正しくなかったことを示し、われわれの当時の見解が一個の幻想にすぎなかったことを暴露してしまった。歴史はなおそれ以上のところまでいってしまった。歴史は当時のわれわれの誤りを打ち砕いたにとどまらず、プロレタリアートが闘うべき条件を全面的に根底からかえてしまったのである。1848年の闘い方は、今はどういう点でも時代遅れになっているのであって、これはこの機会によく突っ込んで検討するに値する点となっている」

「歴史は、われわれや、これに類する考えの者すべてを誤りとした。歴史は、大陸の経済発展の水準が、当時はまだとても資本主義生産を排除できるところまで成熟していなかったのを明らかにした。…しかも1848年には、この二大階級の闘いは、イギリスを別にすれば、わずかにパリや、せいぜい幾つかの大工業中心しかなかった」

「巨大な一撃で勝利を克ちうるにはるかほど遠くして、拠点（陣地）から拠点（陣地）へと苛烈執拗な闘いをゆっくとすすめることを余儀なくされているとするならば、これは、1848年に、単純な奇襲によって社会変革を克ちうるのがいかにも不可能であるかを、余すところなく証明している」

「国民間の戦争の条件もかわった。奇襲の時代、自覚したわずかの少数者が無自覚な大衆の先頭に立って革命を進める時代は終わった。社会組織の完全な変革が問題になる場合には、大衆自身がそれに参加し、何が問題であり、何のために自らが肉体と生命を賭けるのか、を身をもってすでに理解していなければならない。だが、何をすべきか、を大衆が理解するためには、そのことのためには、長く粘り強い作業が必要であり、われわれが今すすめつつあるのは、まさにこの作業なのだ」（下線は引用者）

これはベルンシュタインによって“エンゲルスの政治的遺言”と呼ばれたものであるが、ここで最晩年のエンゲルスが、少数者革命主義を自己批判し、いわば多数者革命への転換が言われている。そして「われわれが今すすめつつある作業」とは、ドイツ社会民主党の組織拡大の成果に踏まえてエンゲルスが提唱した「陣地」戦²⁴のことある。

一般的には立場の左右を問わず、エンゲルスの自己批判は肯定的に受け止められている。たしかに「自覚したわずかの少数者が無自覚な大衆の先頭に立って革命を進める時代は終わった」と総括する以外ないのはその通りだ。

しかし、本稿では、むしろ、〈二極化→革命〉という革命論の破綻、あるいは〈階級対立とは何か?〉について把握の失敗であり、「マルクス主義」が理論的実践的に行き詰まり、そして「マルクス主義」の陣営が一方で修正主義に、他方で政治主義に分解していく前夜において、その危機を折衷した文書として読む。資本主義の成熟度合いや労働者階級の意識の発展といった論点は出ているが、根本的に何が問題であったかについて、残念ながらエンゲルスは終生つかめていない。にもかかわらずそれが問われることなく「マルクス主義」として継承されてきたことを、むしろ問題にすべきだろう。

●小括

第一章では、マルクスとエンゲルス、共産主義者同盟の仲間たちが、『宣言』をもって 48 年革命の渦中に飛び込んで悪戦苦闘する過程を見た。

当初、『宣言』の想定通りに進むかに見えたが、しかしルイ・ボナパルト情勢の中で行き詰まる。それに対して、マルクスとエンゲルスは同盟の路線論議の中で、少数精鋭主義の革命路線（本稿で 50 年路線呼ぶ）への転換を打ち出すが、しかし、実践的には、同盟内での孤立と官憲による弾圧が相まって、同盟は解体を余儀なくされた。マルクス 34 歳の挫折である。

ここで言いたかったのは、〈少数精鋭主義の革命路線は間違いで、『宣言』の革命論に戻るべき〉ということ—ではない。『宣言』の〈二極化→革命〉という革命論の現実とのズレが、少数精鋭主義の革命路線への転換を不可避に促したのである。言いたいのは、〈二極化→革命〉の『宣言』のシェーマ自体を問い直す必要があるということである。第二章、第三章で検討したい。

24 「エンゲルスからカール・カウツキーへ」（1884 年 11 月 8 日『全集』第 36 巻）

第二章 マルクスとエンゲルスと「マルクス主義」

第一章では、48年革命の現実の展開の中から、マルクスの理論的実践的な格闘を見てきたが、第二章では、視角を大きく変えて、マルクスとエンゲルスの理論の全体像の中で、〈二大階級への分裂→階級対立の激化→階級決戦から革命へ〉というシェーマがどのように位置づけられてきたのかという視角で問題を検討したい。

第1節 『宣言』＝マルクスとエンゲルスの交錯点

通説では〈マルクスとエンゲルスは一体〉とされる²⁵。

しかし、両者の理論の形成史を検討したとき、明らかに、初期の『宣言』に至る道においても、また『宣言』以降の後期の歩みにおいても〈一体〉ではなかった²⁶。

では『宣言』はどうか？それは、そういう異なった歩みの中で、両者がもっとも接近し交錯した地点ないし公約数だったということができるだろう。

さらにいえば、1848年革命に至る過程においては、マルクスの方がエンゲルスの方へ接近していったといってもいいだろう²⁷。マルクスが、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』（以下、『大綱』）や『イギリスにおける労働者階級の状態』（以下、『状態』）などを賞賛し吸収していたのもその一端だ。

しかしまた、『資本論』（第I巻 1867）を書き上げたマルクスと、『反デューリング論』（以下『反デ論』1876～78）を書いたエンゲルスとの違いは歴然としている。だからといって、このことは、両者が終生、同志的な絆で結ばれていたと矛盾するものではない。

〈マルクスとエンゲルスは一体〉説に囚われているかぎり、マルクスの理論を理解することは難しいだろう。よって、本稿では、概括的であるが、マルクスとエンゲルスの理論を対照してみたいと思う。

第2節 エンゲルスの理論

まずエンゲルスから。

◇『大綱』『状態』

1842年に渡英したエンゲルスは、労働者階級の現実を目の当たりにして、その根本問題を洞察し、解決の方途を革命に求めていく。その考えを『大綱』（1844）、『状態』（1845）として世に訴えた。『状態』では次のような視角を提示した。

「プロレタリアートは、小中間階級の破滅が進行することによって、少数者の手中への資本の集中が迅速に発展することによって幾何級数的に増大し、やがて少数の百万長者を例外とする全国民を構成するにいたるであろう。だが、こうした発展の途上で、プロレタ

²⁵ 例えば古典的な通説はリャザノフ（1923）『マルクス・エンゲルス伝』

²⁶ 保住敏彦（1995）「エンゲルスの理論活動の意義と問題」、大石高久（1997）『マルクス全体像の解明』

²⁷ 廣松渉（1968, 1994）『エンゲルス論』

リアートが、現存の社会権力を打倒することがいかに容易であるか、ということをとる一つの段階がやってくるであろう。そしてそのときには、革命がつづいておこるのだ」

階級闘争の二極化から革命を展望する歴史観・革命論の輪郭が出ている。これが『宣言』にも反映され、さらにエンゲルスの終生の基調として貫かれていく。

◇『反デ論』

さらに、後期の『反デ論』では一階級闘争の論理を理論的に支えるものとして、歴史的運動の一般理論としての「唯物史観」、その資本主義社会への適用としての「経済学」、その核心としての「剰余価値論」—というエンゲルスの体系を確立した。そして、資本主義の基本矛盾を、〈多数の労働者による社会的＝集団的な生産と、その生産物を個々の資本家が取得するという矛盾〉ととらえた。この矛盾が一 i. 階級対立、 ii. 生産における工場内での組織性と社会全体での無政府性、 iii. 恐慌の爆発—として現れるとした。こうした把握から、階級闘争を通して国家権力を掌握し、〈取得〉の性格を〈社会的〉に転換することをもって、矛盾を解決するとした。エンゲルスの確立した体系は概ねこういう組み立てだった。

◇「マルクス主義」

エンゲルスの体系は、第二インター、第三インターの活動家たちに受容され、「マルクス主義」として普及していく。

例えば、カウツキー起草のドイツ社会民主党「エルフルト綱領」²⁸ (1891) は、中間階級の分解と階級対立の激化、資本主義的生産の無政府性と恐慌の長期化という論理を柱としているが、これは、エンゲルスの基調をよく反映している。

また、レーニンは、『反デ論』について、「彼ら（マルクスとエンゲルス）の見解がもっとも明瞭に、くわしく述べられている」「『共産党宣言』と同じように一意識を持つ労働者のだれもがかならず手もとにおかなければならない書物」²⁹ と推奨している。

▼「唯物史観」と「経済学」

ではエンゲルスの体系はマルクスの理論と同じか？

例えば、「唯物史観」という用語は実はマルクスにはない。これは、マルクスが『経済学批判』「序言」(1859) で述べた「私の研究にとっての導きの糸 [Leitfaden] として役立つ一般的結論」の内容を、エンゲルスがその「書評」(1859) の中で「唯物史観」という造語で解説・定式化して以来、エンゲルスのキー概念となったものである。(なお、Leitfaden は「手引」と訳す方が一般的³⁰)。マルクスにとって“研究の手引”に過ぎなかったものが、エンゲルスによって、〈ダーウインの進化論の発見に並ぶ、歴史の発展法則の発見〉³¹と至上の評価を与えられた。これが、後世の多大な誤解と不毛な論争の原因となった。

「唯物史観」の適用としての「経済学」という点も違う。まずマルクスは「経済学」で

²⁸ 廣松渉・片岡啓治編 (1982) 『マルクス・エンゲルスの革命論』

²⁹ 「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」(1913) 『レーニン全集』第 19 卷

³⁰ 「Glosbe 多言語オンライン辞書」

³¹ マルクスの葬儀でのエンゲルスの弔辞 「カール・マルクスの葬儀」『全集』第 19 卷

はなく「経済学批判」である。さらに「経済学批判」を外から規定する歴史観はマルクスにはない。また「剰余価値論」は重要だが「経済学批判」の核心とはいえない。

そして、「資本主義の基本矛盾」に関して、生産が〈集团的〉であれば〈社会的〉とする理解は誤りであり、〈取得が資本家的〉なのは〈生産が資本家的〉だからであって、この「基本矛盾」理解は全く誤りである。

第3節 マルクスの「経済学批判」

ではマルクスはどうか。マルクスの階級論・階級闘争論の全体像については第3章で検討するとして、ここでは、マルクスの「経済学批判」について簡単に見てみよう。

マルクスの「経済学批判」とは、「国民経済学」では前提化されている貨幣・資本・賃労働などの経済学的な範疇（カテゴリー）に対する批判である。それらの経済学的範疇を〈すべての社会関係が労働から発生³²する〉という観点から把握し直すことである。

このことを通して一資本主義の社会システム³³においては、〈労働する諸個人³⁴の實在的な連関〉が、その疎外態である〈物象³⁵の連関〉に転倒して統一され、それが前面化・全面化しており、近代知の枠内³⁶にいる諸個人の意識においては〈實在の連関〉を捉えられない—その〈實在の連関〉の姿を把握することが「経済学批判」である。

そして、資本主義の社会システムが、「疎外された労働」という本質的な矛盾を持ち、本質的な矛盾ゆえに存立し、また有限であり、資本主義のシステムのうちに、新たな社会システムが潜在している—実はそれが〈實在の連関〉であり、それをアソシエーション³⁷と呼ぶのだが—ということを明らかにすることであった。

▼「概念的把握」と「疎外された労働」

両者の違いは多々指摘できるがその核心は何か？ここでは2点だけ挙げる。

◇概念的把握

ひとつは、経済学批判の「批判」である。〈事物を、固定的孤立的に捉える分析的な方法〉（＝悟性的把握、近代知の方法）に対して、〈分析的な方法〉を包摂しつつ、〈事物に内在

³² 〈発生〉とは、同一形態にとどまる社会や社会的実体が、不断に自己産出の運動を繰り返していること。歴史継起的・時系列的な移行や生成ではない点が重要。〈批判〉という方法と密接不可分。『剰余価値学説史』

³³ 社会を日々産出している根源的主体である〈労働する個人〉と、その疎外態である〈物象的主体〉（→7）とを矛盾的に統一した〈システム〉として、社会を把握する。「総体性としてのこのような有機的システムそのものは、その諸前提をもっており、またその総体性への発展は、とりもなおさず社会のすべての要素を自己に服従させるか、ないし自分にまだ欠けている器官を社会のなかからつくりだす…。このようにして有機的システムは、歴史的に総体性になるのである」（『要綱』）

³⁴ マルクスは、社会や歴史のベースに「諸個人」を置いて考えた。諸個人の歴史的生成を説き、近代社会での市民および階級としての諸個人のあり方を分析し、諸個人のアソシエイトした力によって個人の解放を構想した。『ドイデ』『要綱』

³⁵ 〈物象〉とは商品・貨幣・資本など、資本主義の社会システムの能動的な主体。根源的主体である〈労働する諸個人〉の自己疎外形態。〈労働する諸個人〉が根源的な主体であるのに、主客が転倒して、〈物象〉が主体となっている。『資本論』

³⁶ 補論：概念的把握で説明

³⁷ マルクスは、資本主義社会が産み落とす新しい社会を〈アソシエーション〉と呼んだ。当時の英仏の社会主義者から引き継いだ用語。〈アソシエイト〉とは意識的自覚的に結びついたの意。

する矛盾を捉え、その矛盾を不断に形態化しながら運動する能動的な存在として把握する方法（＝概念的把握³⁸）である。マルクスはこの方法を、理論活動の初期にヘーゲルから批判的に継承し、この方法の確立によって、近代知の枠組みを超えられると確信していた。この方法をもって〈物象の連関〉と〈実在の連関〉を把握し『資本論』に結実させた。

この点で、エンゲルスは、悟性的把握に留まり、概念的把握という方法がない。いやエンゲルスだけでなく、あまたの革命家・理論家たちも近代知の枠から自由ではなかった。〈マルクスは難しい。エンゲルスは分かり易い〉と言われる、その〈難しさ〉〈平易さ〉の問題も、近代知の枠を超えるか否かに関わる問題だった。まさにこの方法において近代知とその超克とが分岐し、マルクスの理論の画歴史的性もそこにあったのだが、「マルクス主義」として整理される中で再び近代知の枠内に引き戻されてしまったのである。

◇「疎外された労働」

今一つは、「疎外された労働」である。要するに「賃労働」であるが、マルクスは、〈労働が、労働する諸個人自身の活動ではなく、資本が設定した目的を実現する活動であり、主体である労働する諸個人が自然と自己とを意識的に制御する活動ではなく、他者である資本によって命令・指揮される活動になっているという主客転倒の状態〉³⁹として捉え、資本主義社会の苦痛の源泉であり、資本主義社会の根源的な矛盾として把握した。これは、労働を疎外と疎外の止揚としてとらえるヘーゲルの労働観を批判的に継承して、『資本論』において体系的に深化されたものである⁴⁰。

エンゲルスにおいては「疎外された労働」の把握がない。そして「マルクス主義」では、「疎外」の概念は〈未熟なマルクス〉として切り捨てられてきた。

そして、この2点に関して希薄なのが『宣言』の特徴でもあった。

●補論：概念的把握

批判という方法のところで触れた「概念的把握」について補足しておきたい。

「頭の中で考えられた、あるいは思いこまれた普遍性ではなくて、個人がもつ実在的諸連関および観念的諸連関の普遍性としての個人の普遍性。したがってまた自分自身の歴史を、一つの過程として概念的に把握すること、そして自然を自分の実在的な身体として知ること」（『要綱』）

概念的把握とは、ヘーゲルにおけるキー概念であり、マルクスはそれを継承した。

まずヘーゲル用語の意味から。ヘーゲルの概念（論）は、事物を部分的ないし表層的に捉えるのではなく、その全体を、深部に入って捉える。それは、事物を自己産出のメカニズムを持つものとして認識することであり、さらに、事物を主体的に発展するものとするのである。つまり〈概念的把握〉とは、事物の再生産構造やその発展の原動力を全面的に

38 『ヘーゲル国法論批判』『要綱』

39 『経哲』『要綱』『資本論』

40 なお、「疎外された」とは、「疎外されない」状態が理論的に前提されているのではない。自然と人間との存在論的な関係と、現実の賃労働の対比から導出されている。

認識することである。⁴¹

近代的諸個人は、商品生産による共同体の解体によって、その反面において生成するわけだが、近代的諸個人の認識＝近代知とは、デカルトの〈われ思う〉であり、〈抽象的・主観的に自由で、自己完結している知〉である。その立場から様々な分析や実証を行うが、しかし、分析や実証をどこまで突き詰めても、〈存在〉そのものに迫ることができない。あるいは、主観主義と経験主義の対立という認識の分裂に陥る。なぜなら、人間の〈存在〉は、実在的には、自然との連関、人間同士の連関として存在するものだが、しかし、近代ブルジョア社会においては、一方で、共同体の解体によって自由＝バラバラの個人となり、他方で、解体された共同性＝普遍性が疎遠なものとして対象化されて人間に対立しており、近代知の方法においては、その〈実在の連関〉を捉えることができないのである。

◇ヘーゲルの批判と継承

どうしたら〈存在〉そのものの把握に至ることができるか。その問いに対する答えたのがヘーゲルの概念的把握であった。それは、近代知の抽象的・主観的な自己完結性を突き破る挑戦であった。

しかしまた、ヘーゲルの概念的把握は欠陥があった。ヘーゲルにおいては、歴史は存在の把握に向かう自己意識の運動であり、そして、存在は、結局、歴史を止揚した存在論理を、歴史的現実超越論的に当てはめたものであり、そして、歴史的現実の矛盾・対立は、ヘーゲルの頭の中で描いた理想的な国家において調和的に統合されてしまう。

マルクスはまさにこのヘーゲルの観念性を批判し、自己意識に対して労働を根底に据えて、歴史的現実の矛盾・対立の把握に向かったのである。まさに〈ヘーゲルのひっくり返し〉である。この転換によって、意識世界を超出した地平において、ヘーゲルの概念的把握を批判的に継承したのである。「疎外された労働」論は、〈労働の本質的関係としての関係の再把握〉という概念的把握に他ならない。

◇20世紀の後退と21世紀

しかし、20世紀において、マルクスがヘーゲルから批判的に継承した概念的把握の理論は引き継がれていなかった。一方における、「マルクス主義」の実証主義・悟性主義、スターリン主義によるその主流化と通俗化。他方で、それを批判するルカーチ、初期フランクフルト派、実存主義派の現象学的な呪縛と限界。

近代知の壁をブレイクスルーするマルクス概念的把握の復権はまだ端初である。⁴²

●補論：「疎外」概念に対する「未熟」「断絶」「難点」

「疎外」概念が後期マルクスにおいて継承されているかいないかという問題は、文献考証的には、既に古い議論として整理され、決着を見ていると思う⁴³。

⁴¹ 『ヘーゲル用語事典』

⁴² 『マルクス・カテゴリー事典』を参照

⁴³ 例えば、リュベル(1973/邦訳1977)『マルクスにおける経済学の形成』、杉原四郎(1974)『マルクス経済学の形成』、山本広太郎(1985)『差異とマルクス』

しかしにもかかわらず、依然として問題であり続けているのは、それが、純粋な理論研究上の問題ではなく、政治問題、スターリン主義問題、近代知の問題として提起されているからだろう。つまり、単に「疎外」という文言の問題ではなく、上で見たような概念的把握といった問題、マルクスがヘーゲルから批判的に継承した近代知を突き破る核心問題を引き継ぐのか、あるいは、そのような核心問題を削ぎ落とし洗い流して、近代知の分析と実証、悟性主義の世界に引き戻して解消するのか、という問題として「未熟」「断絶」「難点」という論難があるという点を強調したい。

◇「未熟なマルクス」 スターリン主義

ソ連時代の公認の見解は次のようなものであった。

「…マルクスがこの草稿（『経哲』）で用いている疎外という概念が意味するところの社会的歴史的発展の客観的過程を十分にふさわしく表現したものではない…。この時代のマルクスはまだフォイエルバッハの人間学の影響を完全に克服してはおらず、その結果、彼が定式化した史的唯物論と科学的社会主義の諸命題は、成熟したマルクス主義にふさわしくない用語であらわされている」⁴⁴

スターリン主義の「史的唯物論と科学的社会主義の諸命題」にとって、「疎外」概念がいかに「ふさわしくない」、相容れない用語であるということを端的に述べている。

◇「認識論的断絶」 アルチュセール

アルチュセールは、「断絶」に関して概ね次のように述べている。によれば、〈マルクスは新しい科学を切り開いた。新しい科学とは史的唯物論である。『フォイエルバッハ・テーゼ』と『ドイツ・イデオロギー』がその切断の大ナタである。しかし『要綱』や『資本論』にはヘーゲル思想の影響が残っていて論述の形式や中身を歪めている。商品論は、そのために難解になっており、書き改める必要がある。中でも商品の物神論は「目に余る極度に有害な」ヘーゲルの影響である〉⁴⁵

マルクスが批判的に継承したヘーゲル概念的把握を忌避し、切断することに主眼があるということが表明されている。

◇「疎外論の難点」 廣松渉

廣松の主張は概ね以下。〈初期マルクスの疎外論は難点を孕んでいる。1845年ごろを境にしてマルクスは思想的に飛躍する。だから初期マルクスと後期マルクスを区別する。初期から後期への飛躍を「疎外論の論理から物象化論の論理へ」という成句で表現できる〉⁴⁶

しかし、廣松の言う「物象化」とは〈目に見えない仮象〉であり、「疎外から物象化へ」とは、〈マルクスから現象学（フッサール、ハイデガーなど）への転回・超出〉であった。マルクスが、実体と形態の矛盾に社会を産出する能動性と有限性を捉えていたのに対して、

⁴⁴ ソ連科学アカデミー哲学研究所編（邦訳 1961）『世界哲学史』第5巻／岩淵慶一（2007）『マルクスの疎外論』より引用

⁴⁵ アルチュセール（1965）『マルクスのために』、（1971）『レーニンと哲学』／副田満輝（1980）『マルクス疎外論研究』を参照

⁴⁶ 廣松渉（1971）『史的唯物論の原像』、（1974）『マルクス主義の理路』

廣松においては、その矛盾を、目に見える形態によって、目に見えない実体を否定する関係に置き換え、もって矛盾を消去し、マルクスの社会システム把握・批判の核心を解体することになったのである。⁴⁷

「断絶」や「難点」のその後の顛末であるが、アルチュセールにおいては「マルクス主義理論は『有限』である」としてマルクスから離れていき、また廣松においては新カント派的な論理へと転回し、つまり両者とも、疎外論を切断することによって、実は自らをマルクスから切断するところに行き着いたのであった。

●小括

「マルクス主義—とはマルクスの諸見解と諸学説の体系である」⁴⁸（レーニン）—これが通説であった。この「マルクス主義」を基準として、革命運動・階級闘争をたたかってきた。

しかし、ここまでの検討で分かるように、「マルクス主義」とは、エンゲルスによって体系化された理論、あるいは、エンゲルスの理解によって整序されたマルクス解釈であって、マルクスの理論の核心が継承されていなかった。

このような認識の刷新が必要である。

もちろん、ここで取り上げたような「マルクス主義」を原型のまま墨守している論者は、今日においてはむしろ稀と言った方がいいかもしれない。スターリン主義批判の広がりがあり、ソ連の体制崩壊があり、また新 MEGA⁴⁹にもとづく研究も進められており、確かにマルクス像もずいぶん刷新されてきている。〈マルクスとエンゲルスの違い〉を指摘する研究も珍しくない。しかしなお、「マルクス主義」の規定性は依然大きい。

なぜかと言えば、近代の中で生きるわれわれが、即自的には例外なく近代知の枠の中で思考するからだろう。そういう中で、「マルクス主義」に対するマルクスの理論の核心を復権することが、理論の上でも、また実践の中でも、大きな困難を伴うということだからだ。

そういう意味で、第三章のマルクスの階級論・階級闘争論は、アクチュアルなテーマになるだろう。

⁴⁷ 山本広太郎（1985）『差異とマルクス』

⁴⁸ 「カール・マルクス」（1918）『レーニン全集』第 21 巻

⁴⁹ MEGA は、Marx-Engels-Gesamtausgabe「マルクス・エンゲルス全集」の略称。旧 MEGA と新 MEGA がある。旧 MEGA は、レーニンの時代から始められ、ソ連や東ドイツに引き継がれたもの。東ドイツの Marx-Engels-Werke（略称 MEW）から日本語に翻訳したものが大月書店刊行の『マルクス・エンゲルス全集』だが、これは「全集」というが未収録の文献がある。それに対して、新 MEGA は、「マルクス・エンゲルス国際財団」によって現在進行形で進められている出版物、遺稿、草稿、書簡の文字通りの「マルクス・エンゲルス全集」。

第三章 マルクスの階級論・階級闘争論 —〈二極化→革命〉への対論

●ここまでの論旨の整理

◇テーマ

- ・〈二極化→革命〉という『宣言』の革命論は妥当なのか？マルクスの理論なのか？
- ・1848年革命期の中で『宣言』の革命論はどうだったのか？
- ・階級対立とは？階級闘争とは？これは自明なことか？
- ・マルクスの理論とエンゲルスの理論と「マルクス主義」は同じか？

◇構成

第一章 48年革命からルイ・ボナパルトの登場へ

- ・50年少数精鋭主義への転換
- ・『宣言』の想定と現実のズレ
- ・〈二極化→革命〉という革命論を問い直す必要

第二章 マルクスとエンゲルスと「マルクス主義」

- ・エンゲルスの理論としての〈二極化→革命〉論
- ・マルクスの理論の核心としての概念的把握
- ・「マルクス主義」の下での20世紀の後退

第三章 マルクスの階級論・階級闘争論 —〈二極化→革命〉への対論

第1節 階級対立の真相・本質

第2節 自然史・人間形成史と階級対立

第3節 階級闘争論—いかにたたかうか？

・ ・ ・

第1節 階級対立の真相・本質

▼『資本論』第52章 諸階級

「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」の有名な一節で『宣言』第1章は始まるが、「階級」「階級闘争」「階級闘争の歴史」という用語ないし見方は、マルクスも言明している⁵⁰ように、マルクスの独創ではない。テイエリやギゾーなどのフランス王政復古期の歴史学に寄ったものである。

マルクスは、さらに、スミスやリカードなどの経済学を批判的に継承し、『資本論』の最終章が「第52章 諸階級」となっていることから分かるように、階級対立の本質・真相とその廃絶の展望を明らかにすることがマルクスの大きなテーマであった。

◇原稿の未完

第52章では、まず、労賃、利潤（利子＋企業利得）、地代という収入の源泉に対応して、労働者、資本家、土地所有者という三大階級を示している。

⁵⁰ 「1852年3月5日付ワイデマイヤー宛マルクスの手紙」『全集』第28巻

この階級の区分は、分配関係（どこからどのようにして収入を得ているか、剰余生産物の取得のあり方）によって区分を示したものである。これは、リカードないし国民経済学の到達地平を確認したものだと言える。

ところが、第 52 章は、この確認の後、「しかしながら、この立場からすれば…」と議論の転回を示唆したところで、原稿は未完のまま途切れている。

◇分配関係から生産関係へ

第 52 章に至る『資本論』の展開からすれば、少なくとも次のような趣旨が未完部分に続くように見えていいだろう。

分配関係は、生産関係（人びとが生産の中で取り結ぶ社会的関係）によって決定されているのであり、分配関係は、生産関係の表現・結果に過ぎない。だから、階級関係を把握するうえで、分配関係だけを見て生産関係を見ないのはまだブルジョア経済学に囚われた見方であると。すなわち、資本主義社会における階級関係を把握するには、資本主義的生産関係のあり方を見なければいけないということである。

よって、資本主義的生産関係の特徴を 3 つの視角から見て、そこから資本主義社会における階級対立の真相・本質を把握していきたい。

（一）資本・賃労働関係＝搾取関係

階級対立の真相・本質の第一は、資本主義的生産関係の基本的性格である資本・賃労働関係＝搾取関係である。

どんな社会であれ、労働しない階級が存在する階級社会では、労働に従事する階級によって生産された生産物のうちの剰余生産物を、労働しない階級が搾取し、消費する。資本主義的生産関係では、一方で、労働する諸個人は、労働諸条件（労働手段・労働対象）から完全に切り離されて、労働力を商品として売らなければ生活できない賃労働者となっており、他方で、労働諸条件が、自立化して資本となっている。その資本が、非労働者である資本家によって人格的に代表されている。

そして、資本が、労働市場で買い入れた労働力と、商品市場で買い入れた生産手段とを消費することによって、労働力の価値より大きい新たな価値を生産し、両者の差額である剰余価値を取得する。資本主義的生産とは、資本が、このようなやり方で剰余価値を搾取し、自己を増殖する生産なのである。

（二）「疎外された労働」

階級対立の真相・本質の第二は、「疎外された労働」という労働の自己矛盾である。

では、資本・賃労働関係は何によって規定されているのか。労働の本質的關係に即して資本・賃労働関係を把握（概念的把握）したとき、その根本に「疎外された労働」が把握される。

労働する諸個人が、労働諸条件から完全に切り離されており、生産過程の中で、労働諸

条件にたいして、他人に属するものにたいする仕方であらざる（sich verhalten）。つまり、人間社会の基礎をなす労働が、労働諸条件から疎外されている。

このような「疎外された労働」の結果として、生産された生産物は、他人＝資本家によって取得されることになる。そして、資本家は、生産手段の所有者として振る舞うことができ、また、労働する諸個人は、再び、労働力の売り手として市場に登場しなければならない状態にある。

そして、「疎外された労働」が資本主義的生産関係の本質的矛盾であり、それが矛盾する社会システムの根底に座って、労働の自己矛盾を媒介として、不断に社会システムを発生させているシステム原理である。

このように、「疎外された労働」という労働の自己矛盾した振る舞いによって、階級対立は根源的に産出されているのである。

（三）生産関係の物象化と物象の人格化

階級対立の真相・本質の第三は、物象と物象の対立である。

資本主義的生産関係においても、根源的には、労働する諸個人が社会システムを不断に産出している。ところが、このような実在の連関は後景に押しやられ、商品・貨幣・資本などによる物象的な連関が前面に出て、全面化しているところが、資本主義的生産関係の特異性である。

① 生産関係の物象化：資本と労働力との物象的な連関

資本主義的生産関係の要は資本・賃労働関係であるが、同時に、それは商品生産関係の最も発展したものであり、資本・賃労働関係によって規定された商品生産関係である。

その商品生産の特徴は、社会の総労働が自然発生的に分割され、労働する諸個人の労働が私的労働となっていることである。労働する諸個人の労働は、直接には、社会的性格を持っていない。ところで、どの社会でも社会として成り立つには、総労働の社会的分割と総生産物の分配という社会的な連関がなければならない。そこで、私的労働をもってする商品生産の場合、労働する諸個人の私的労働が、交換という回り道の中で、商品・貨幣という物象による連関を通ることで、初めて社会的に連関する（生産関係の物象化）。

こうして、資本主義的生産関係における人びとの社会的関係は、資本という物象と労働力という物象の間の関係、つまり物象的な連関として現れるのである。

そして、今や、根源的な主体である労働する諸個人に対して、その客体が物象として主体化し自立化し、逆に、労働する諸個人を引きずり回すに至るまで、完全に転倒して疎外の完成にまで至っているのが資本主義的生産関係なのである。

◇諸形態の自己産出運動

言い換えれば、物象的な連関を通して、労働の私的性格を社会的性格に転換するという回り道をせざるをえないという矛盾が、〈私的労働としての社会的労働〉ないしく私的なものと

としての社会的なもの⁵¹という矛盾（「私的所有」⁵²という矛盾）として、商品から貨幣、貨幣から資本、そして資本の諸形態へという自己産出運動を展開する。それは矛盾を不断に他に媒介し形態化することによって解決する運動であり、資本主義社会を社会として成り立たせている矛盾の運動であり、その矛盾を廃棄するまで留まることのできない運動である。

②物象の人格化：資本家と賃労働者との関係

①で見たように、商品的生産において前面に現れるのは、生産者間の人格的關係ではなく、物象的な連関であったが、その物象を人格的に体現したものが、資本家であり労働者である。資本家も労働者もその主観はどうあれ、資本という物象の人格化と、労働力という物象の人格化であり、その意志は、資本・労働力という物象によって規定されている。それらが市場では、互いに、労働力の買い手（資本家）と売り手（労働者）という契約当事者として現れる。また、生産過程では、指揮者かつ管理者（資本家）と、その指揮・管理に従う者（労働者）として現れる。

◇二重の関係

こうして、資本主義的生産では、生産関係の物象化によって、人びとの社会的關係が物象的な連関として現れ（①）、それだけでなく、物象の人格化によって、諸物象がもろもろの人格によって代表される（②）。このような生産関係の物象化と物象の人格化という二重構造の下で、資本主義的生産関係は、一方で、資本・賃労働関係＝搾取関係を本質としながら、他方で、前面においては、資本家も労働者も区別のない、自由・平等・自利・自発の世界として展開される。（資本関係と商品関係の転回）

▼3つの視角

以上で、資本主義的生産関係の下での階級対立を、（一）資本・賃労働関係＝搾取関係、（二）「疎外された労働」という労働の自己矛盾、（三）実在の連関に対する物象の連関の前面化・全面化／物象の人格化と物象と物象の対立、という3つの視角においてとらえきた。階級対立の問題に限らず、この3点で捉えることが、マルクスの社会システム把握の基本であると考えられる。

こうして見ると、階級対立ということが、一見、自明のようであってそうではないということも分かるだろう。

51 「交換あるいは交換取引は、したがって、私的所有の内部での人間の社会的行為、類的行為、共同の本質、社会的な交通と統合であり…」(『ミル評注』「ミル著『政治経済学要綱』からの抜粋)「生産者たちは自分たちの労働生産物の交換によってはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の特殊的に社会的な性格もまた交換のなかではじめてあらわれるのである」(『要綱』)「Aかつ非A」という矛盾。静止という抽象の相では存在できないが、しかし、存在の運動においては、「Aであること」と「非Aであること」とは、それぞれ独自に形態化(対象化)して媒介することによって、統一システムの存在様式として存在する。マルクスが対象について言う「矛盾」とは、このようなシステムの存在様式。これを把握できないのが悟性的把握、把握できるのが概念的把握。

52 「疎外された労働」が、労働における自己矛盾であり、資本主義的生産関係の本質的矛盾であり、自己の対象を他者の対象として実現する矛盾。これに対して、「私的所有」は、「疎外された労働」の対立性として、「疎外された労働」の能動性を対象化された矛盾であり、資本主義的生産関係の直接的矛盾であり、「私的なものとしての社会的なもの」という自己矛盾として、資本の諸形態の自己産出運動を展開させている矛盾である。

労働者は、資本家に対立している。しかし労働者が対立しているのは、その人間個人ではなく、資本の人格化である資本家なのである。そして、労働者は、単に資本家に対立しているだけでなく、自己の私的労働が産出する物象的な連関に対して対立している。しかしまた、資本という物象の人格化となって現れている人間諸個人とたたかう。

◇「マルクス主義」の欠陥

また、このように（一）（二）（三）において把握する観点からすると、「マルクス主義」が基本的に（一）の資本・賃労働関係＝搾取関係の観点だけしかないということがわかるし、そういう観点から、「二極化→革命」というシャーマもその観点から出ているということが明らかになる。

・ ・ ・

ではいかにたたかうのかという問題は、第3節で検討したい。

第2節 自然史・人間形成史と階級対立

第2節では、階級対立論を、自然史・人間形成史という本源的な観点で見ておきたい。

(1)マルクスは、人間を自然史の中で捉えた。つまり、自然が人間を産出したのであり、人間は自然の一部である。そして、自然の自己疎外態としての人間と自然とが労働を媒介にして連関し、そういう疎外過程を通して、自然が自然の中に（自然の一部である）人間を自己回帰する過程として、自然史をとらえた。

(2)マルクスは、人類史を人間形成史として捉えた。近代ブルジョア社会は、人間における個別と普遍（共同性・社会的なもの・自然との結合）が分裂し、自立化した普遍が人間に対立している疎外過程である。そして、人間と人間、人間と自然が対立的形態を取ることを通して人間を陶冶し、再び統一を回復に向かう過程である。

◇ポイント

(1) 人間と人間の対立、人間と自然との対立は、2つにして1つの問題であり、分裂・対立から統一の回復に向かう過程である。

(2)人間の労働、その労働のあり方が、対立を規定し、統一の回復の過程を規定する。

(3)だから、労働こそ社会システムを産出する根源的な行為であり、労働する諸個人こそが主体である。

→階級闘争の2つ目の契機の物質代謝の攪乱論へ

・ ・ ・

◇自然史と人間

人間は自然の一部であり、自然が人間を産出する。そして、自己産出した人間の労働を媒介にして、自然が自己自身（自然自身）と連関し、やがて自己（自然）回帰する。これが自然の自己運動としての自然史である。人類史はその一局面に過ぎない。

◇人間と労働

諸個人は、個別性であると同時に、類としての普遍性であり、その統一である。

個別性とは、諸個人があくまでも有機的的身体に局限されているという意味である。

普遍性とは、諸個人が、自然に対して、また他人に対して、さらにそれらを通じての自己に対して、普遍的に（＝類に対する態様で）関わる、という意味である。

諸個人は、労働において、自らの普遍性を不断に対象化する。そこで、対象化されるものは、社会関係、社会的労働、労働の客観的・自然的諸条件からなる、人間に固有な客体である。

諸個人は、自らの普遍性を不断に対象化し、そのことを通して、個別性と普遍性の統一を実現している。

これは、大自然の自己運動としての自然史における人間的な局面である。

◇自立化・主体化と対立

ところが、近代ブルジョア社会では、対象化された普遍性が自立化し、この自立化したものが主体（諸物象）となっている。そして、自立化し・主体化した普遍性が、逆に、労働する諸個人を単なる個別性として、自己に従属させている。これが、階級対立である。同時に、自立化し・主体化した普遍性は、自分自身を産出した自然との有機的統一に対して無関心であり、対立的に振る舞っている。これがエコロジー危機である。

◇疎外過程

このように、近代ブルジョア社会は、産出されたものが、産出したものに対立的に自立化するという、疎外の関係が貫かれている矛盾論的統一のシステムである。

同時に、人類史は、人間の自己形成史である。対立において産出している潜在的統一を、疎外＝物象化過程を通じて、主体である労働する諸個人が、自己の個別性と普遍性との有機的な統一を回復ししていく過程である。

資本主義社会は、その疎外関係の局限形態であり、人類史の必然的な通過点である。

◇主体は労働する諸個人

重要なことは、労働こそ社会システムを産出する根源的な行為であり、したがって労働する諸個人こそが主体であるということである。

労働は次のような本源的な意義を持っている。

・労働は、自己を、普遍的契機と個別的契機とに不断に分離し、媒介的に統一しながら発現する人間形成的行為

・労働は、自己の普遍的契機を、生産手段と生産関係とに形態化しつつ、不断にこれと個別的に統一する行為

・労働は、普遍的契機の形態化によって自己を媒介するとともに、同時にこれを自己の制約とする行為

・労働は、労働自身と媒介的制約との矛盾を解決しながら、労働自身を社会的労働に陶冶していく行為

このように、労働こそ社会システムを産出する本源的な行為であり、労働する諸個人が

その主体であるからこそ、人間と人間の対立においても、人間と自然の対立においても、その矛盾を解決するのは労働する諸個人であり、労働をめぐるあり方であり、階級闘争とはその解決の過程の悪戦苦闘であるということである。

第3節 階級闘争論—いかにたたかうか？

第1節でマルクスの階級対立の真相・本質を見たが、では、そこから、階級闘争をどのようにたたかうかの契機について考えたい。

『資本論』第3篇第8章「労働日」でマルクスが論じたものこそその内容である。その点を(三)で見るとして、次の2つの視点である。ひとつは、(一)「私的なものという社会的なもの」という矛盾という視点であり、今一つは、(二)物質代謝の攪乱—生存・生命・自然という視点である。

(一)「私的なものという社会的なもの」という矛盾

資本のシステムの「私的なものとしての社会的なもの」という矛盾において、不断に露出させる「社会的なもの」こそ階級闘争の契機である。

▼商品関係と資本・賃労働関係の転回

第1節で見たように、資本のシステムは、「私的なものとしての社会的なもの」という矛盾を抱えており、それゆえに、「社会的なもの〔Gemeinwesen〕」を不断に露出させつつ、それに対して、資本のシステムの外面に形態化⁵³を成長させ、公共的形態化をもって媒介することで、不断に矛盾の「解決」を図っている。

仮に、純粹の商品のシステムがあったとして、「社会的なもの」を商品や貨幣という形態に留めておくことができるならば、同一に自己の前提を再生産することによって、そのシステムは歴史を産出しない、いわば永久機関となるだろう。商品関係で自己完結していたら、意識は、物象の連関の中に閉じ込められて出口はない。

しかしそうではない。商品のシステムの実現は、資本のシステムのものとしてしかありえず、資本のシステムは、「私的生産としての社会的生産」として、社会的生産が私的生産の対立物として、「社会的なもの」を不断に露出させる。そして、商品関係と資本・賃労働関係は不断に転回⁵⁴している。

▼「社会的なもの」の形態化

「社会的なもの」の不断の露出に対して、資本のシステムは、不断に「社会的なもの」を形態化させ、外面的に成長する。

(1) 公共性の形態化

⁵³ 形態化：矛盾を内包した事物が、矛盾する両項（「Aであること」と「非Aであること」）を、それぞれ独自に形態化（対象化）して、振動しながら統一する＝媒介することによって、よりこの高次の個別的存在様式として存在する。矛盾を不断に解決するものとして矛盾から産出されるもの。

⁵⁴ 転回：『要綱』『資本論』におけるキー概念。『資本論』第22章「商品生産の取得法則の資本主義的領有法則への転回」。2つの契機が、矛盾を解決しないまま、それぞれ無媒介に姿態化して、たがいに他を批判しながら他に依存し、両姿態の不断の転回として存立している。

- ・労働組合の法認、賃金闘争の制度化、公的教育制度、社会保障制度、住宅政策など

(2) 私的領域から公共的領域の分化

- ・港湾、道路、鉄道、通信などの産業基盤、独占禁止や中小企業保護、財政金融政策など

(3) 民主主義の現実化

- ・社会形成の評価軸としての民主主義、労働者の階級闘争の正当性

(4) 公共的形態化の総括しての国家

これが、資本のシステムにおける「私的生産としての社会的生産」の発展であり、歴史の産出である。

▼「社会的なもの」の私的諸資本の公共性への転回

しかしまた、「社会的なもの」の形態化は、その形態を保持したまま、私的諸資本の利益に転回する。

資本のシステムは、外面的に成長する形態化＝資本主義的外被の成長という形で、歴史化してきた。

▼矛盾の自覚化と階級闘争

「私的なものとしての社会的なもの」の矛盾が「社会的なもの」を不断に露出し、「社会的なもの」としての対立性の自覚が、階級闘争の契機となる。

- ・ 「社会的なもの」の露出に対して、〈「社会的なもの」は、そもそもわれわれ自身のものだ〉という労働者の返還要求が正当性を持つ。
- ・ 公共性の形態化が擬制であり、擬制に対して真正の公共性を対置して争う。
- ・ 労働者の運動として、「社会的なもの」を実践的に着手する。
- ・ 生産過程のみならず、消費過程・生活過程において「社会的なもの」
協同組合、社会的事業、介護事業、地域通貨…、社会的連帯経済
- ・ 最大の攻防は、生産過程における「社会的なもの」をめぐる攻防

▼アソシエーションの萌芽

資本のシステムが露出し形態化する「社会的なもの」の現実化と普遍化が、労働者のアソシエーションの根拠であり、その萌芽である。

労働する諸個人は、アソシエーションの萌芽を拠点に、「社会的なもの」を要求し着手し経験しながら、物象的連関の作動を規制し終息させていく。

(二) 物質代謝の攪乱—生存・生命・自然

人間と自然との間の物質代謝の攪乱が、人間という側面からも、自然という側面からも、もはや持続可能性の危機を突き付けている。重要なことは、物質代謝の攪乱の問題は、人間と自然との間の問題だけではなく、人間という自然との関係でも問題である。そして、その両側面から人間に対して、物象的連関の限界を自覚させ、階級闘争の契機となっている。

▼資本の目的が価値増殖

資本主義的生産関係においては、価値こそが動因である。資本の目的が価値増殖である。ゆえに、人間と自然との間の物質代謝を媒介し、社会的使用価値を生産する労働過程は、資本の価値増殖のための手段となる。

このことがもたらす問題である。それは、人間の生命・生存を破壊し、同時に、自然を破壊する。まさに人間と自然の物質代謝を破壊する。

▼人間の生命・生存を破壊

◇労働日の最大限の延長

- ・絶対的剰余価値の追求は、労働日の最大限の延長を追求する。
- ・資本は労働力の寿命を問題にしない。使い捨てにすることを厭わない。

◇労働力商品への作り替え

・相対的剰余価値のための生産力上昇の追求は、機械制大工業の発展と労働過程の変革をもたらす。それは、賃労働者から技能や知識を剥奪し、賃労働者を生産手段に従属させ、賃労働者を労働力商品という物象の人格的担い手に作り替えて行く。

◇夜間労働

・機械設備を効率的に使い切るため、労働日の延長だけでなく、夜間労働を追求する。それは労働者の身体・健康を蝕む。

◇貧困の蓄積

・資本蓄積の進展と資本の有機的構成の高度化によって、相対的過剰人口を恒常的に生み出し、貧困を蓄積する。

◇安全・衛生の削減

・利潤率上昇のために不変資本を節約する。それは、安全や衛生のために措置を削り、労働者の生命・身体を危険にさらす。

▼自然を破壊

◇自然力の酷使

・資本にとって基準は価値であり、価値の観点から見て自然力は「無償」である。
・資本は、自然力の持続可能性を考慮することなく、それを最大限に利用し尽くそうとする。

◇土地の持続性の破壊

・資本主義的農業の進歩は、土地からの略奪の技術の進歩であり、土地の豊度の不断の源泉を破壊する。

・人間が消費し廃棄したものが土地に帰ることで、土地の豊饒性を持続させる条件であるが、資本主義的生産はこの条件を攪乱する。

・土地の持続性の破壊が、都市でも農村でも、労働者の健康や精神を蝕む。

◇環境問題＝労働問題

人間の生命・生存に関わる労働問題と、人間と自然の物質代謝に関わる環境問題とは、不可分である。それは、第2節で見たように、人間が自然の一部であるわけだが、自然史の

疎外過程として、物象としての主体が自然との有機的統一に無関心であり、同時に、物象としての主体が、労働する諸個人を単なる個別性として従属させているからである。

▼マルクスとエコロジー論

注意したいのは、人間と自然の物質代謝の攪乱＝環境問題＝エコロジー危機について、近代ブルジョア社会が「人間中心主義」だからもたらされているのではないということである。逆である。近代ブルジョア社会は人間の制御する社会ではない。近代ブルジョア社会は、資本のシステムであり、物象が主体となり、労働する諸個人をひきずりまわしている社会システムであるからこそ、人間の生命・生存に対しても、自然の持続可能性についても無関心なのであり、人間と人間も、人間と自然も対立しているのである。

したがって、マルクスの中にエコロジー的な観点もある、ということではなく、むしろ、疎外＝物象化論を柱とした資本のシステムにおける主体・客体の転倒を批判したマルクスの観点をすえないと、エコロジーは論じられないという点が重要である。⁵⁵

人間という側面からも、自然という側面からも持続可能性の危機があり、そのことが人間に対して、物象的連関の下では人間も自然も壊れてしまう、という危機感が、階級闘争の重大な契機となっている。

(三) 労働日の規制と短縮の階級闘争

労働日をめぐる攻防は、(一) で見たような生産点における「社会的なもの」をめぐる攻防であり、同時に、(二) で見た生存・生命・自然に関わる死活的な問題であり、階級闘争の核心的な契機が凝縮している。

「彼ら（労働者）の苦痛の蛇⁵⁶にたいする『防衛』のために、労働者は結集せねばならない。そして、一つの国法を、すなわち、労働者自身が資本との自由意志による契約で、自己と同族とを死と奴隷状態とに売り渡すことを、阻止する一つの強力な社会的バリケード⁵⁷を、階級として、奪い取らなければならない。『奪うべからざる人権』⁵⁸の華麗な目録のかわりに、法律によって制限された労働日のじみな大憲章⁵⁹が現れ、それは『ついに、労働者の売り渡している時間が、いつ終わるのか、また、彼自身に属する時間が、いつ始まるのか、を明瞭にする』。なんとという大きな変化であろうか！」（『資本論』第3篇第8章）

マルクスは、『資本論』第3篇第8章「労働日」を、当初の計画から「歴史的に拡大した」

⁵⁵ 近代を「人間中心主義」として批判し、それに対して「生物圏平等主義」を掲げ、国策として推進したのがナチスであった。ナチスにおいては、ユダヤ人の「生命」は家畜の「生命」よりも軽かった。藤原達史（2005）『ナチス・ドイツの有機農業 「自然との共生」が生んだ「民族絶滅」』

⁵⁶ 旧約聖書の中の言葉

⁵⁷ 向坂訳『資本論』では「超強力的社会保障」だが、不破哲三（2015）『マルクス「資本論」 発掘・追跡・探究』で「社会的バリケード」と訳しているのでこれを採用した。

⁵⁸ アメリカ・ヴァージニアの「権利章典」（1776年）に出てくる言葉で、その後、「人権」の形容詞でよく使われた。不破哲三（2015）『マルクス「資本論」 発掘・追跡・探究』

⁵⁹ 労働日を制限する法律の意味。「大憲章」自体は1215年のマグナカルタ。王の専政にたいする市民が反抗し王権を制限。

と述べている⁶⁰。これは、上の第8章末の一節からもうかがえるように、マルクスが、労働日をめぐる攻防の中に、階級闘争の核心的な契機があると捉えていたからである。労働日の無制限の延長が労働者の肉体を破壊し、種族の存続をも危うくしていること、にもかかわらず資本家はその本性としてそのことを厭わないこと、それにたいして、当時のイギリスの労働者には選挙権もなく、議会に労働者の代表が一人もいないという中で、半世紀にわたる内乱を通して労働日を制限する工場法をかちとっていったことなのである。

▼労働日と工場法

◇資本の本性

資本主義的生産は、資本による剰余価値の生産であり、剰余価値の増大は資本の本性であり、資本の本質的衝動である。個別資本は、社会的強制がない限り、雇用した労働者の労働時間をできうる限りどこまでも延長しようとする。

◇労働日

しかし、生きた身体をもつ労働者には、生命力を更新できる健康な睡眠、労働力を正常に維持できる休息時間が必要である。また、人間的教養、精神的生命力、社会的諸活動、社交などのための時間も必要である。しかも、休息と睡眠は毎日、必要とする。だから、労働力の販売は〈毎日一定時間に限って労働する〉という形で行われ、単位としての1日の労働量を、イギリスでは「労働日 (working day)」と呼んできた。そして、肉体的・精神的生命力の発揮のための時間を確保できる範囲内に労働時間を制限するよう求める権利として、労働者は、労働力の売り手として、〈標準労働日〉を要求してきた。

◇労働者と資本の闘争

労働者の要求は、商品の売り手としての権利の主張である。労働日をめぐる攻防は、商品交換の法則にもとづく、商品の売り手の権利の主張と、買い手の権利の主張との争いであり、同等の権利をめぐる、力と力の対決である。19世紀のイギリスでは、労働者による労働時間の短縮のために闘争が粘り強くたたかわれるも、制定された法律に強制力のないために徒労に終わったり、資本家の逆襲によって法律が公然と破られるという挫折を経験しながら、1850年の工場法をもってようやく、(まだかなりの労働者が例外とされたが)、労働日に制限が加えられ、その短縮が進められてきたのである。

▼工場法の階級闘争的な意味

◇社会的バリケード

第一に、工場法は、まさに労働者の生命・生存を守るかどうかのに関わる「社会的バリケード」である。

◇「社会的なもの」による規制と強制

第二に、資本のシステムの「私的なもの」の枠内ではあるが、資本のシステムの「私的なもの」という社会的なもの」という矛盾に対して、「私的なもの」の完結性を突き破り、「社会的なもの」をもって規制し強制するものである。

⁶⁰ 「マルクスからエンゲルスへの手紙 1866年2月10日付」『全集』

しかも、労働者の生命・生存に関わって展開された。ここにマルクスは大きな意義を見出したと見るができるだろう。

工場法の意義は、自由時間の拡大など、様々な観点から階級闘争的意義を見ることができが、(一)「私的なものという社会的なもの」の矛盾という観点と(二)生存・生命の観点の重なり合った契機としてとらえることが重要であるとする。

もちろん、とはいえ、工場法は、労働者の現状に対する一時的な解決に過ぎなかった。資本のシステムの側は、これを公共性の形態化としてとりこみ、イギリス資本主義の一層の発展のテコにもした。にもかかわらず、この観点が階級闘争の永続的な契機であることは変わらない。そして、このことは21世紀の今日、ますますアクチュアルな問題である。

・ ・ ・

■第I部 まとめ

●第三章・第1節 階級対立の真相・本質

- (一) 資本・賃労働関係＝搾取関係
- (二) 「疎外された労働」という労働の自己矛盾
- (三) 実在の連関に対する物象の連関の前面化・全面化／物象の人格化と物象と物象の対立

●第三章・第2節 自然史・人間形成史と階級対立

- (1) 人間と人間の対立、人間と自然との対立は、2つにして1つの問題、分裂・対立から統一の回復へ向かう過程
- (2) 人間の労働、その労働のあり方が、対立を規定し、統一の回復の過程を規定
- (3) だから、労働こそ社会システムを産出する根源的な行為、労働する諸個人こそが主体

●第一章 『宣言』〈二極化→革命〉のシェーマ

- ・ 階級対立の真相・本質 (一) (二) (三) の3つの視角の (一) だけに一面化・一元化 (厳密には剰余価値論も未確立だが)
- ・ マルクスにおいては、『要綱』、『資本論』の過程で、(一) (二) (三) の3つの視角をトータルに確立
- ・ エンゲルスにおいては、終生、(一) のみであり、(二) (三) を理解しなかった。
- ・ 両者の間には、悟性的把握に留まるか、概念的把握に踏み込むのか、という存在把握の方法をめぐる根本的な違い、近代知の限界をめぐる違いが存在した。
- ・ 「マルクス主義」の革命論は、エンゲルスの理解の限界内で展開されてきた。

●第三章・第3節 階級闘争の2つの契機

- ・ 〈階級闘争の二極化・対立激化〉という方向の延長に革命を設定するのは、原理的に違う。

・次の2つの契機が革命に向かう階級闘争の契機である。

①「社会的なもの」の現実化と普遍化

・「私的なものとしての社会的なもの」の矛盾が「社会的なもの」を不断に露出し、「社会的なもの」としての対立性の自覚である。

・「社会的なもの」の露出に対して、「社会的なもの」は、そもそもわれわれ自身のものだとして要求し、着手し、実践し、経験していく。社会的連帯経済、生産点へ

・「社会的なもの」の現実化と普遍化が、労働者のアソシエーションの根拠であり、その萌芽であり、その要求・着手・実践・経験を通して、アソシエイトした諸個人を生み出し、物象の連関にたいする実在の連関＝アソシエーションを生み出していく。

②生存・生命・自然の危機への自覚・実践

・人間と自然の物質代謝の危機＝生存・生命・自然の危機が、人間という側面からも、自然という側面からも、もはや持続可能性の危機を突き付けており、そのことが人間に対して、物象的連関の限界を自覚させ、階級闘争の契機となっている。

●社会革命・政治革命・経済革命

社会革命とは、要するに、資本主義社会の中に潜在する〈実在の連関〉＝アソシエーションをもって、資本のシステムの〈物象の連関〉に対して置き換える作業である。

しかしそのためには、生産関係の物象化と物象の人格化によって、〈実在の連関〉に対して疎遠な関りに置かれている労働する諸個人が、①「社会的なもの」の現実化と普遍化、②生存・生命・自然の危機の自覚と実践ということを契機にして階級闘争をたたかうことで、アソシエーションをたぐりよせていくのである。

『経済学批判』「序言」に踏まえるならば、社会革命とは、おおよそ次のようにまとめられるだろう。

社会革命は、①まず、資本主義の社会システムの内部に、アソシエーションの萌芽が発生し始め、②次に、資本主義の社会システムに対応していた政治構造に替わって、アソシエーションに対応する政治構造が打ち立てられ（**政治革命**）、③最後に、その政治構造の下でアソシエーションが急速に拡大され支配的な生産関係になる（**経済革命**）、という一連の過程として進行するということだろう。

・ ・ ・

マルクスは、以上のように、『宣言』をもって1848年革命に突入してぶつかった壁を乗り越えてきたと言えるだろう。また、マルクスは、このような革命への接近過程と階級闘争のイメージをもって、インターナショナルの「創立宣言」「暫定規約」を書いたと思われる。この点については、第二部で見たい。

■ 参考文献

◇ マルクス

『マルクス・エンゲルス全集』

『資本論』

『資本論 第一部草稿 直接的生産過程の諸結果』

『経済学批判要綱』

◇ 主要な参考文献

有井行夫 (1987) 『マルクスの社会システム理論』

〃 (1991) 『株式会社の正当性と所有理論』

有井・長島 (1995) 『現代認識とヘーゲル＝マルクス』

有井行夫 (2010) 『マルクスはいかに考えたか』

岩佐・佐々木 (2016) 『マルクスとエコロジー』

大石高久 (1997) 『マルクス全体像の解明』

大谷禎之介 (2001) 『図解 社会経済学』

〃 (2011) 『マルクスのアソシエーション論』

山本広太郎 (1985) 『差異とマルクス』

◇ 事典

『マルクス・カテゴリー事典』

『新マルクス学事典』

『ヘーゲル用語事典』